

(3面より続く) 実はこのことがよく見えてこないのです。さらに言えば、協会加盟出版部にしても、母体大学(帰属大学のこと。Parent University)の改革と出版部とがどのようにかかわっているのか、十分に分かっているとは思えないのです。大学出版部とは「母体大学」名を頭に戴いた出版組織ですが、まさに「よかれ・あしかれ」、私たちは、このことから自由になれない、いや自由になってはならないのです。とするならば、大学の進まんとしている道は、その出版部と無縁ではないのです。それどころか、出版部の「道」であるかもしれないのです。

(渡邊 勲 大学出版部協会幹事長・(財)東京大学出版会専務理事)  
A J U P (大学出版部協会)のWebサイト (<http://www.ajup-net.com/>) より部分転載。

### 会員登録および会費納入のお願い

昨年11月3日に設立され、発足した東京学芸大学出版会ですが、その後順調に歩みを進めておりまして、このたび第2回刊行本「折り紙と算数とコンピュータ」を発行するに到りました。第1回刊行本「これからの教育と大学」の配本も順調に進んでおり、ホームページの開設も行われて、対外的にも注目を集めはじめています。改めて申し上げるまでもなく、東京学芸大学出版会は会員による自費出版を基本としておりまして、誰でもが会員となることができ、会員であれば誰でもが自分の本を出版できる機会を得ることができます。こうした新しい形の開かれた大学出版会である東京学芸大学出版会の存在は、いま混迷の度を深めつつある我が国の教育に、必ずや深い影響を与えることとなるものと信じます。

- さて、会員登録および年会費4,000円の納入について以下のようにご案内申し上げます。
- ・会員登録については所定の申込書に必要事項を記入し、ご返送ください。申し込み書は、出版会事務局に用意してありますので、お申し出下さい。会費納入の確認により会員登録が済みますと、会員番号が発行されます。
- ・年会費4,000円の納入は、青色の振り込み票を使い、最寄りの郵便局から行ってください。なお寄付金の場合、赤色の振り込み票をお使いください。口座番号は「00190-5-138733」、加入者名は「東京学芸大学出版会」です。
- ・本やCDなどの出版をお考えの方は、「出版の手引き」および「出版企画提案書」が用意されておりますので、出版会事務局までお問い合わせください。ご請求があり次第すぐにお渡しさせていただきます。
- ・会員の特典はまず自著が出版できることです。もちろん内容と経費の裏付けが必要になりますが、可能性は格段に向上するはずで、何人かのグループで本を出すこともこれまでよりずっと簡単に出来るようになります。また、Press News などの各種刊行物の配布や催し物の案内を受けることができます。

### 東京学芸大学出版会ホームページが開設されました。

この度、東京学芸大学出版会のWebサイトが、技術科教育学研究室の坂口謙一先生及び同研究室所属の大学院生のご尽力により、開設されました。とても斬新なデザインですので、皆様も一度是非アクセスしてみてください。本学出版会と致しましては、このサイトを活用して、今後様々な情報提供を行っていきたく考えています。URLは、<http://www.u-gakugei.ac.jp/~upress/index.htm> です。

**編集後記:** この News は、七夕と元旦の一年度間に二回の発行を予定しています。七夕号は、名誉教授をはじめとするOBの方々のご寄稿を巻頭に置き、編集させて頂く方針です。七夕にふさわしい再会の喜びを味わって下さい。今回は初代研究科長をも歴任された大井みさほ先生にご登場頂きました。玉稿に対し衷心より御礼申し上げます。(Y&S)

東京学芸大学出版会(Tokyo Gakugei University Press)

〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1

東京学芸大学構内

編集: 渡邊健治(出版会編集長)・池田義人(事務局長)・腰越滋(Press編集長)

連絡先: Email [upress@u-gakugei.ac.jp](mailto:upress@u-gakugei.ac.jp) 電話042(329)2190 Fax042(329)2191

発行日 2002年7月7日  
発行 東京学芸大学出版会  
編集 東京学芸大学出版会事務局

### 巻頭言: 子どもと読書 大井みさほ(本学名誉教授)



いきなり自分のことをいうのも気がひけるが、戦時中から戦後にかけて、小学生の私が読める本といったら戦争がひどくなる前に兄のために買った本であった。それらの多くは、父がフィリピンに行く前に友人に頼んで毎月兄に買い与えたものだった。今思い出してみるといわゆる良書といえるものが多かった。本箱の扉を開けると、新潮社の「君達はどう生きるか」など青少年文庫の数冊、岩波の「地図の話」、「渡り鳥」、など、「太陽」、「数学の歴史」、「趣味の数学」などが並んでいた。全部で60冊ぐらいあったろうか。少し難しかったが、気に入った本は繰り返し読んだ。童話などもあったけれど、今と違ってものがない時代には同じ本を繰り返し読むしかなかったのだ。戦後しばらくして落ち着いた頃、中学2年の私に父がはじめて買ってくれた本が岩波書店の「科学の事典」であった。このときのうれしさは忘れられない。ものがない時代なのにこんな分厚い立派な本を私みたいな女の子のためにと思って感激したのだ。学校で習う波やモーターと発電機などいろいろな項目をすごく考えながら熱心に読んだ。

高校2年の終わりに進路を決めるべきときがあった。私は本で気に入っていたアルキメデスやガリレオの話、電気や波の現象を思い出していた。そのときまでに私は高校の生物と化学はとったが物理はとっていなかった。しかしこうしたものは「物理」というものではあるまいかと、物理学科を受験することに決めた。

今考えてみると、私の回りにあった本が私の人生に大きく影響したのである。もし出会った本が良書でなければ、これほど影響しなかったかもしれない。そう思うと子どもにどういふ本を与えるかはとても難しく、そして重要なことといえる。人形遊びが気に入っていて、きれいな布の切れ端を集めては人形の服をつくり、将来はそういう仕事をしたいと少しは思っていた女の子を物理に進ませてしまったのだから。東京学芸大学出版会が教育に関係深い大人向けの本を出版するだけでなく、ぜひがんばって子ども達のための良書も出版して欲しい。



### 目次:

巻頭言: 子どもと読書 (大井みさほ)	1面
広告: 『これからの教育と大学』	2面
寄稿: 知的障害養護学校の絵本の読み聞かせ (奥住 秀之)	2面
広告: 『折り紙と算数とコンピュータ』	3面
特別掲載: 「東京学芸大学出版会の誕生」& 「いま、なぜ、大学出版部か？」 (大学出版部協会幹事長 渡邊 勲)	3~4面
お知らせ: 会員登録および会費納入のお願い&出版会ホームページの開設	4面
編集後記:	4面



## 第一回刊行本

『これからの教育と大学』 絶賛発売中！  
東京学芸大学出版会 設立準備会「これからの教育と大学」  
制作委員会 編集 東京学芸大学出版会 発行 / 学校図書  
株式会社 発売 A5版 285頁 定価2,000円 + 税

本書は教育に悩む大勢の人たちに読んでいただきたい。  
特に学校の先生、教育委員会や父兄の方々に是非とも読んで  
いただきたい。なぜわが子が、なぜこんなことを、と悩  
む親や教師は本書のなかで該当する項目を見出し、答えら  
しきものも見出すことができるであろう。しかしそれは決  
して問題の解決でなく、むしろ出発点である。そこから、  
ではどうしたらよいか、筆者グループと一緒に考えて  
て頂きたいのである。(「あとがき」より)



平成13年11月3日  
東京学芸大学出版会設立記念総会より(於・芸術館)

## 知的障害養護学校の絵本の読み聞かせ

## 奥住秀之(附属特殊教育研究施設)

仕事柄、知的障害養護学校に行く機会がよくあります。そこでは、さまざまな場面で、「絵本の読み聞かせ」を行っています。例えば、「朝の会」とか、「あそびの時間」とか、「ことば・かず」の授業で。使っている絵本を見ると、最近出版されたものに混じって、「大きなかぶ」とか、「三匹やぎのガラガラドン」とか、私たちが子どもだったころによく読んでもらった物語もあって、懐かしさを感じてしまいます。

子どもたちは、教師に絵本を読んでもらうことで、なかまと一緒に、笑い、泣き、悲しみ、物語の楽しみを共有します。そして、子どもたちは、「絵本を読む」活動を通して、さまざまな「つもり」の場面を知り、なかまや教師とのやり取りを学び、意思伝達の道具である「話しことば」や「文字ことば」に出会います。

一方で、絵本に興味を示そうとしない、あるいは、絵本への注意が長続きしないといった子どもたちが養護学校にいるのも事実です。どうしたらそういった子どもたちと絵本の楽しみを共有できるのか、絵本という「文化」を通じて子どもたちの発達を促すことができるのか、教師はさまざまに工夫を凝らします。

ある教師は、絵本を読むときに音楽を流します。いくつかの音楽を準備しておいて、場面ごとに音楽を変えながら子どもの注意を引き付けるのです。また、あるクラスでは、複数の教師が読み聞かせに参加します(養護学校の授業はたいてい複数の教師によるチームティーチングです)。例えば、大きなかぶの「うんとこしょ、どっこいしょ」では、教室にいる先生がこの場面でいっせいに声を出すのです。教室にこだまする迫力ある教師の声は、子どもたちの絵本への気持ちをひきつけます。

さらに、ある教師は、紙芝居のように拡大させた絵本を作成して、子どもの注意を引き付けます。子どもが本に触って楽しめるように、絵の表面にフェルトを貼り付けるなどの工夫を凝らし、一方向的な読み聞かせではなく、絵本に対しての子どもたちの積極的な反応を大切にしているのです。

でも、もっともっと子どもの「向かう気持ち」を引き出したい。そういう教師のねがいが、次のような実践を生み出しました。かなり拡大した絵本を使うのですが(もうこれを絵本と呼んで良いのかどうか...)、登場人物が描かれているところに、ぽっかりと穴があいています。大人の顔くらいの大きさです。そして、まさしくその穴には、物語の登場人物に変装した教師の顔があるのです。つまり、教師は絵本の裏から顔を出して、絵本の一部になってしまう。

絵本の顔は子どもたちに語りかけます。絵本の中の顔は、物語が進むにつれリアルに笑い、泣き、叫び、子どもの注意を引きつけます。子どもたちは、絵本の主人公とともに笑い、泣き、叫ぶ、手を伸ばして絵本の顔をじかに触ります。教師の顔は子どもの手でめちやくちやにいじられてしまい、子どもの手にはリアルな顔の感触...絵本という教材を挟んでの教師と子どもたちのコミュニケーションがそこにはあり、子どもの「向かう力」を最大限引き出そうとしたほんとうに魅力的な実践です。

こういう場面を目の当たりにすると、障害のあるすべての子どもの無限の発達をねがって、教師は日々授業に取り組んでいるのだと強く確信するのです。

## 第二回刊行本

『折り紙と算数とコンピュータ』 最新刊！  
池田義人・腰越 滋・山中 和人 共著  
附録CD-ROM(内容は数学教育世界会議にて発表されたものです)  
発行 東京学芸大学出版会 総発売元 (株)安井電子出版

本書を使えば、誰れでもが、特別な技術を必要としないで、すぐに、折り紙とコンピュータを用いた算数の学習を行うことができます。あなたが...、学校の先生ならば、画期的に新しい授業を实践できるでしょう。子どもの教育に悩む父兄のひとりならば、子どもと一緒に考えて考えることのできる時間の素晴らしさに明るい展望を見いだすことでしょう。これからの教育について思いを巡らす人ならば、きっと新しい時代の息吹を本書のなかに見いだすに違いありません。



A5版 192頁 定価3,000円+税

東京学芸大学出版会は、その設立準備段階から大学出版部協会より多大なる御支援を頂いてきております。以下の文は、同協会のホームページで本学出版会設立の紹介をして頂いたもので、執筆者の渡邊 勲同協会幹事長の了解を得て、ここに掲載するものです。大学出版部協会は、2000年4月現在、準会員大学を含め、全26大学の出版部から構成されています。また、各地域にある出版部の加盟校・協力校を加えれば、北海道から沖縄に至るまで、全国59大学を網羅する我が国最大規模の学術出版団体です。

## 1. 東京学芸大学出版会の誕生

21世紀最初の「文化の日」に設立総会を開催するので、大学出版部協会幹事長として祝辞をお願いしたい、とのご依頼を受けておりましたので、11月3日午後、雨模様の中、設立総会会場である小金井の東京学芸大学芸術館に伺いました。学長の岡本靖正先生と出版会設立の中心にあつてご苦労されてきた池田義人先生のお迎えを受け、まずは別室へと案内されました。そこには、記念講演者の北海道教育大学学長・村山紀昭先生と、ご祝辞を述べられることになる小金井市長・稲葉孝彦氏、学芸大学同窓会理事長・佐藤倫則氏が既にお揃いでした。

定刻1時に総会は始まりました。開会挨拶、設立に至る経過報告(副学長)、寄付金納入報告、設立趣意説明(図書館長)を経て議事となり、定款説明、役員候補、事業計画案、質疑応答、そしてそれらの承認と、よく準備された設立総会は滞りなく進行しました。すべての議事を終了し、初代出版会理事長に就任された岡本学長のご挨拶となり、祝辞、記念講演へと、会は連なっていくのです。

私がここで、東京学芸大学出版会設立総会の模様をやや詳しくご報告したのは、大学出版部の本性にかかわる重要な理由(わけ)があるのです。大学出版部は母体大学に依拠した出版組織です(前回にも同趣旨のことを述べました)。では、母体大学に依拠するとはどういうことでしょうか。それは一つには、大学の学問研究・教育実践の成果に依拠する、ということですが、実はもっと大切なことは、とりわけ出版部設立に当たって重要なことは、その出版部が「全学的な協賛と祝福を背景にして誕生することが出来たかどうか」ということなのです。このことは、設立後の具体的な出版活動と「著者・出版部・読者」の関係作りの上に、決定的な影響を及ぼすことになる、私は考えています。

総会後の祝賀懇親会で、私は意識的に、大学の事務局長とお話をしました。それは、先生方とは違う意味で、職員の皆様方の、出版会との距離感がいかに重要な意味をもつか、よく承知しているからです。そして、私は安堵しました。事務局長は、任意団体として生まれたばかりの出版会について、予想される困難をも踏まえた、しっかりした見識をもっておられることが分かったからです。

## 2. いま、なぜ、大学出版部か?

ここ数年のことですが、新しい大学出版部が続々と誕生していることをご存知でしょうか。例えば、上智大学出版会、東京都立大学出版会、東京外国語大学出版会、立教大学出版会、等々です。大学出版部協会は1963年に8大学出版部と2学術団体で発足し、すでに38年の歴史をもっていますが、大学出版部創設の機運がこれほどに盛り上がった時期はなかったと思います。私が皆さんとともに考えてみたいのは、「いま、なぜ、大学出版部か?」という素朴な疑問です。よく言われるように、1991年「大学設置基準の大綱化」を起点としての、また大学就学人口の激減予測とその現実化を目前にしての「大学改革」のインパクトがその背景にあることは、まず間違いのないところでしょう。では大学は、どのような改革(の一部)として、大学出版部の立ち上げを構想したのか、あるいは構想しつつあるのか、(4面へ)